

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載  
 【部門区分】第 7 部門第 3 区分  
 【発行日】平成22年9月24日 (2010.9.24)

【公表番号】特表2006-505215(P2006-505215A)  
 【公表日】平成18年2月9日 (2006.2.9)  
 【年通号数】公開・登録公報2006-006  
 【出願番号】特願2004-550165(P2004-550165)  
 【国際特許分類】

H 0 4 L 12/56 (2006.01)

G 0 6 F 13/00 (2006.01)

【 F I 】

H 0 4 L 12/56 3 0 0 A

G 0 6 F 13/00 5 2 0 B

【誤訳訂正書】  
 【提出日】平成22年7月9日 (2010.7.9)  
 【誤訳訂正 1】  
 【訂正対象書類名】明細書  
 【訂正対象項目名】0 0 0 8  
 【訂正方法】変更  
 【訂正の内容】  
 【0 0 0 8】

場合によっては、通常サーバとみなされるオブジェクトが、クライアントとして働き要求を出ことができ、通常クライアントとみなされるオブジェクトが、サーバとして働き要求に应答することができる。さらに、単一のオブジェクトが、他のサーバ/クライアントに対するサーバとクライアントの両方、またはそれ自体に対するサーバとクライアントの両方であってよい。たとえば、デスクトップ・コンピュータは、データベース・クライアントおよびデータベース・クライアント用のユーザ・インタフェースを実行することができる。デスクトップ・コンピュータ・ユーザがデータベース・クライアントを操作してデータを求める要求を出させる場合、データベース・クライアントは要求をおそらくデータベース・サーバに発行する。データベース・サーバが同じデスクトップ・コンピュータ上で実行される場合、デスクトップ・コンピュータは實際上、それ自体に要求を出す。本明細書では、クライアントとサーバが異なり、ネットワーク、物理的な距離、セキュリティ手段、およびその他の障壁によって分離されることが多いが、これはクライアントおよびサーバの必要な特徴ではないことを理解されたい。

【誤訳訂正 2】  
 【訂正対象書類名】明細書  
 【訂正対象項目名】0 0 2 4  
 【訂正方法】変更  
 【訂正の内容】  
 【0 0 2 4】

トランザクション・アクセラレータは、クライアント側トランザクション・アクセラレータが1つのクライアントとのみ対話し、サーバ側トランザクション・アクセラレータが1つのサーバとのみ対話するように専用であってよいが、トランザクション・アクセラレータは、複数のクライアントおよび/または複数のサーバを取り扱うことができる。複数のトランザクションを取り扱う場合、同じクライアントおよびサーバの場合でも、場合によっては異なるクライアントおよび場合によっては異なるサーバの場合でも、持続セグメント・ストアに記憶されているセグメントをそれぞれの異なるトランザクション、それぞれの異なるクライアント、および/またはそれぞれの異なるサーバに係り付けることができ

る。たとえば、トランザクション・アクセルレータが、所与のトランザクションを取り扱う際に、データのセグメントを見つけその持続セグメント・ストアに記憶した場合、そのデータ・セグメントの参照を異なるトランザクションで再び使用し、異なるクライアントまたは同じクライアントおよび異なるサーバまたは同じサーバに関係付けるか、またはまったく異なるクライアント・サーバ・アプリケーションに関係付けることができる。

【誤訳訂正 3】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0078

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0078】

TAは、クライアントがファイルを閉じるときに特定のサーバ上の特定のファイルに関するクライアント側PSS内のすべてのセグメントを削除するように指示するヒューリスティックなどのPSSハウスクリーニング用のルーチンを含んでよい。サーバ側PSSも、対応するセグメントを削除するか、またはすべてのクライアントがファイルを閉じるまでこれらのセグメントのハウスクリーニングを延期することができる。他のハウスクリーニングでは、寿命を超えたか、またはしばらく使用されていないセグメント・エントリを削除してよい。他のヒューリスティックは、特定のセグメント・バインディングをいつ使用し破棄すべきかを示すことができる。

【誤訳訂正 4】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0080

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0080】

図4は、エンコーダ140およびPSS142を示している。TA用のTTはエンコーダ140のみであってよいが、TTは他の機能または要素を含んでもよい。図示のように、エンコーダ140は、符号化すべきデータ用の入力と、入力データに関する制御パラメータおよび帯域外情報を符号化するための制御入力とを有している。エンコーダ140は、PSS 142に記憶される符号化済みデータおよびセグメント・バインディング用の出力を有するように示されている。動作時には、エンコーダ140は、入力データを処理し、データのセグメントを識別し、セグメントのデータを参照で置き換え、セグメント・データおよびセグメント参照をバインディングの形でPSS 142に与え、符号化済みデータを出力する。図4に示されているように、結果として得られる符号化済みデータは、参照、バインディング、および残留データ（参照で効率的に表すことのできないデータなど）を含んでよい。本明細書では、残留データを「参照無しセグメント」とも呼ぶ。いくつかの態様では、セグメント化されたが参照されていないデータとセグメント化されていないデータとの間に違いが存在する。前者には、セグメントの明確な開始位置および終了位置があるが、セグメント・コンテンツがセグメント参照で置き換えられることはなく、後者では、セグメントの開始位置も終了位置もないなどの違いがある。以下の説明を簡単にするために、この違いを無視する。

【誤訳訂正 5】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0091

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0091】

図7は、図4のエンコーダによって出力し図5のデコーダによって復号化することのできるデータを復号化するプロセスを示すフローチャートである。このプロセスの各段階を「S1」、「S2」などと呼び、各段階は一般に、特に明示しないかぎり順序正しく進行する。第1の段階（S1）で、参照付きデータ（たとえば、参照で符号化されたデータ）を受信し

トークンとして解析する。トークンを検査し (S2)、そのトークンが参照でない場合は参照無しセグメントである可能性が高く、したがって、トークンを直接出力する (S3)。しかし、トークンが参照である場合、デコーダは、参照がデコーダをサポートするPSSに存在するかどうかを検査する (S4)。存在する場合、デコーダはPSSからその参照付きセグメントを取り出す (S5)。存在しない場合、デコーダは、デコーダをサポートする参照リゾルバに変換要求 (S6) を送信し、変換された参照付きセグメントを参照リゾルバから受信する (S7)。参照ラベルによってセグメント・データの供給源が符号化されている場合、そのラベルを、参照リゾルバが、参照付きセグメントを見つけるのを助けるのに用いることができる。